



湖月抄

二  
+  
四

湖月抄







白宮

細

卷名以詞号之

之白宮

又若夫將たり

河物結り世いの世人のみり共り中おしきく少く

いひつぐあきまき之依之有あ候き志細作身共六云隠

きわたりとら古人の難きとせり物結りも細河海記

よ秀あつる河雲隠と云事人の遊玄のゆりもの古来用

まり禁忌の羽ケるべし也但他志の或アガ奇雲くれり

秋の月うると後ういあがり表傷よあうざり然ん此物結

え河海ゆもいりごとく天右の法文よてりたり作り物結り

かハ空道也桐壺帝と延喜よびり等の歌ハ假諦也此雲

隠ハ中道也教考キクシ時と教チは物結の中もそれり五

四帖皆亦有亦空門之心也好色の名も終ハ佛乃キ瑞キとら

媒也オカキとら畢竟ハ雲隠ハ名いりりよて不書シカ之説モ家シ不シ然

そ故者物結一部之中ウキ表情とくけり人々海くよて事つと



より。はたは源氏崩御の事と云ふ言語も及べし。又曰く。この御の事と云ふ。一は。思之傳志の類向云々者也。幻巻とは。自文の事と云ふ。ひご九年と云ふ。一は。巻より。は。業の良。鈴めく。年記と云ふ。つ也。幻巻めく。ハ。業之。今。後。十四。業めく。え。版の。事。あり。ハ。十三。業めく。の。事。ハ。雲。隠の。中。小。ゆ。づ。り。と。云。ふ。事。ハ。宿。本。の。事。す。と。云。ふ。事。ハ。記。雜。礼。と。り。別。よ。と。り。花。名。十。四。業。と。り。十。九。年。と。り。と。の。事。と。り。と。あ。れ。ど。も。九。業。の。事。と。り。と。事。と。り。と。事。と。り。

ひらりくれまひり

細保崩御の故と云り  
花名若菜磯茂は強指  
一歩かいて三年の故  
又昇遊と云ふ事  
のゆへに立つて  
人花保氏表の容儀入  
ふを世徳化と云けり  
と人の子孫の中より  
二孟日  
おりののみと云

ひらりくれまひり

細保崩御の事と云ふ言語も及べし。又曰く。この御の事と云ふ。一は。思之傳志の類向云々者也。幻巻とは。自文の事と云ふ。ひご九年と云ふ。一は。巻より。は。業の良。鈴めく。年記と云ふ。つ也。幻巻めく。ハ。業之。今。後。十四。業めく。え。版の。事。あり。ハ。十三。業めく。の。事。ハ。雲。隠の。中。小。ゆ。づ。り。と。云。ふ。事。ハ。宿。本。の。事。す。と。云。ふ。事。ハ。記。雜。礼。と。り。別。よ。と。り。花。名。十。四。業。と。り。十。九。年。と。り。と。の。事。と。り。と。あ。れ。ど。も。九。業。の。事。と。り。と。事。と。り。と。事。と。り。















もやうらわし  
秋中玄明の中玄堂  
文二文三又うらわし

去の死乃盛ん

細瀬うらわし  
さうらわし

度のさうらわし

孟母の業とつこり  
つこり

天子の形よりく光明峰  
寺を坂多相茂の山程子

くはれり  
明の上夜寂田  
あもさるる  
三條の雨夕  
あもさるる

のめく  
あもさるる

換とら  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

十  
細花多十六  
中ねは仕と

一  
行川老うん奉記の  
お遠わろ

二  
の秋中ねは

三  
近中將朝 栗田園白道  
兼天元三十三侍從寛和

二七十六石中將

如ふ

と早進は

たわく 孟自給人

落させて

は切ら

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる

あもさるる  
あもさるる











くらしのあまのさし  
くは 孟蓮宗のおうりま  
まねりて あり  
てはくさくさく  
つのもあり 細 五障  
くさうりといふげ  
るあがりてちる舎儀  
がひや 何女身猶有  
五障一者不得作梵天  
者 齋 齋 三者 魔 王 四者  
轉輪聖王 五者 佛 身 者  
提婆矣  
かろくうののせとて  
はせしとて世のいふ  
はわりさるるれは枝若  
らよ同ぢくは世とて  
よういかりさぬよあや  
まのせんとて

くらしのあまのさし  
くは 孟蓮宗のおうりま  
まねりて あり  
てはくさくさく  
つのもあり 細 五障  
くさうりといふげ  
るあがりてちる舎儀  
がひや 何女身猶有  
五障一者不得作梵天  
者 齋 齋 三者 魔 王 四者  
轉輪聖王 五者 佛 身 者  
提婆矣  
かろくうののせとて  
はせしとて世のいふ  
はわりさるるれは枝若  
らよ同ぢくは世とて  
よういかりさぬよあや  
まのせんとて

くらしのあまのさし  
くは 孟蓮宗のおうりま  
まねりて あり  
てはくさくさく  
つのもあり 細 五障  
くさうりといふげ  
るあがりてちる舎儀  
がひや 何女身猶有  
五障一者不得作梵天  
者 齋 齋 三者 魔 王 四者  
轉輪聖王 五者 佛 身 者  
提婆矣  
かろくうののせとて  
はせしとて世のいふ  
はわりさるるれは枝若  
らよ同ぢくは世とて  
よういかりさぬよあや  
まのせんとて

くらしのあまのさし  
くは 孟蓮宗のおうりま  
まねりて あり  
てはくさくさく  
つのもあり 細 五障  
くさうりといふげ  
るあがりてちる舎儀  
がひや 何女身猶有  
五障一者不得作梵天  
者 齋 齋 三者 魔 王 四者  
轉輪聖王 五者 佛 身 者  
提婆矣  
かろくうののせとて  
はせしとて世のいふ  
はわりさるるれは枝若  
らよ同ぢくは世とて  
よういかりさぬよあや  
まのせんとて











ゆきくふらうきりひととみまを捨てらるるうきりひととみまの心細く  
ほろろ人の老をわらわるといふ事と百年と少く花あがまらぬ  
 老とよらうきりひととみま  
前頭文有葉條抄 老菊 衰菊 三曲 樂天  
 花被衣 別後世の老れよらうきりひととみま  
 白ひきりたり 孟川

ひらのほけい  
 三つうりむりところ  
 長くお中りてとく別  
 人の目よらうきりひととみま  
 一もも十ももなぬ  
 こそ人のひきりめ

うよめづらひきりひととみまの心細く  
 一もも十ももなぬ  
 世の人のひきり  
 うきりひととみま  
 源中おけまふはつるはまらうつ  
 白まの白ま入るり多  
 源中おけまふはつるはまらうつ  
 白まの白ま入るり多  
 源中おけまふはつるはまらうつ

異本やん  
 一もも十ももなぬ  
 白まの白ま入るり多  
 源中おけまふはつるはまらうつ

冷泉院の一ま  
 孟波江の女乃弘微殿  
 一のま

ふきりひととみまの心細く  
 一もも十ももなぬ  
 世の人のひきり  
 うきりひととみま  
 源中おけまふはつるはまらうつ  
 白まの白ま入るり多  
 源中おけまふはつるはまらうつ  
 白まの白ま入るり多  
 源中おけまふはつるはまらうつ







冷泉院とて立廻りゆく

わらわらん人をして

二世世よらとむへくひは  
まきしをひきかまわり  
てこそいふ

わらわらん人もまじらひ

海交系 ニシラに 早紀  
盆 葉と女二文よへいり  
あやうやまふはまきこ  
いりもまきうひあひる

しらよのけられまされまじらふ

せして人のありし海とやういふまらよのけ

よしとてさしぬふめくゆく

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

よりさしぬらん人もいふにけり

のいふいふさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

ゆられらん人もまじらひ

よめさしぬれん人もまじらひ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

さしぬてさしぬてぬかぬくひけ

二葉と女二文よへいり  
あやうやまふはまきこ  
いりもまきうひあひる

二葉と女 細 女三文の湯方  
わらわらん人もまじらひ  
のいふいふさしぬてぬかぬくひけ  
のらん

わらわらん人もまじらひ  
のいふいふさしぬてぬかぬくひけ  
のらん







いづれいづれ 細末の奥  
 依りていづれいづれ  
 孟普通て人よ又せぬ  
 りるるいづれいづれ  
 しくいづれいづれいづれ  
 とつらつらいづれいづれ  
 のりそらのいづれいづれ  
 細末の奥の正月は時  
 夕暮れ大居よてたふ  
 うけつるるるるる  
 西膳射信和天皇負觀  
 二年正月十八日始之賭  
 弓ハ天子ヲ揚殿ヨ幸志  
 て弓と由使とて仲妻  
 の月弓とてるるる  
 りおより 西府 左近北  
 の倉人射之た大將村々  
 の奏とて半半異て  
 多之近赤乃管能るる  
 花正月賭射とて  
 の大おの里亭とて選  
 といつらつらとて  
 は付夕暮れ大居大將  
 くとて由使とて

三歳後の  
 いづれいづれいづれ  
 くわいづれいづれいづれ  
 ぶつらん  
 ゆいづれいづれいづれ  
 いづれいづれいづれ  
 せんのうらづいづれいづれ  
 りゆいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 のまいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 らのいづれいづれいづれ

いづれいづれ 細末の奥  
 依りていづれいづれ  
 孟普通て人よ又せぬ  
 りるるいづれいづれ  
 しくいづれいづれいづれ  
 とつらつらいづれいづれ  
 のりそらのいづれいづれ  
 細末の奥の正月は時  
 夕暮れ大居よてたふ  
 うけつるるるるる  
 西膳射信和天皇負觀  
 二年正月十八日始之賭  
 弓ハ天子ヲ揚殿ヨ幸志  
 て弓と由使とて仲妻  
 の月弓とてるるる  
 りおより 西府 左近北  
 の倉人射之た大將村々  
 の奏とて半半異て  
 多之近赤乃管能るる  
 花正月賭射とて  
 の大おの里亭とて選  
 といつらつらとて  
 は付夕暮れ大居大將  
 くとて由使とて

いづれいづれいづれ  
 くわいづれいづれいづれ  
 ぶつらん  
 ゆいづれいづれいづれ  
 いづれいづれいづれ  
 せんのうらづいづれいづれ  
 りゆいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 のまいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 らのいづれいづれいづれ

いづれいづれ 細末の奥  
 依りていづれいづれ  
 孟普通て人よ又せぬ  
 りるるいづれいづれ  
 しくいづれいづれいづれ  
 とつらつらいづれいづれ  
 のりそらのいづれいづれ  
 細末の奥の正月は時  
 夕暮れ大居よてたふ  
 うけつるるるるる  
 西膳射信和天皇負觀  
 二年正月十八日始之賭  
 弓ハ天子ヲ揚殿ヨ幸志  
 て弓と由使とて仲妻  
 の月弓とてるるる  
 りおより 西府 左近北  
 の倉人射之た大將村々  
 の奏とて半半異て  
 多之近赤乃管能るる  
 花正月賭射とて  
 の大おの里亭とて選  
 といつらつらとて  
 は付夕暮れ大居大將  
 くとて由使とて

いづれいづれいづれ  
 くわいづれいづれいづれ  
 ぶつらん  
 ゆいづれいづれいづれ  
 いづれいづれいづれ  
 せんのうらづいづれいづれ  
 りゆいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 のまいづれいづれいづれ  
 さいづれいづれいづれ  
 らのいづれいづれいづれ











